

## 青葉の頃

電車の中は満員ではなかったが、座れなかった。啓子はヒールの靴を踏みしめてつり革を握った。見上げるとメタリックグレーの艶のある地に赤、白、緑のタイルをピラミッド状に配した洒落たポスターが風に揺れている。それは新宿にある「日本電算機総合学院」というコンピュータ学校の生徒募集の広告であった。昭和四十四年三月の中央線電車中のことである。

当時の啓子は三十五歳、小学校六年生の長男を頭に四人の子の母であった。一番下の三男は前々年の十二月生まれで、生後一年三ヵ月。課長代理になったとはいえ、夫祐一の給料では、家賃とこれだけの家族の糊口を潤すにはとても足りない。そもそも祐一は入社と同時に結婚届、出産届を出したことで有名になったという家計は、初めから火の車であった。啓子はそんな家計を助けるために、庭にプレハブの部屋を作って、小、中学生を集めて学習塾を開いていた。

最初は小学校5年生の優秀な女生徒二人だったが、看板一つ掲げた訳でもないのに、いつか総勢六十人ほどになっていた。毎日、夕食前に小学生が交代で二クラス、夕食後に中学生、日曜日には高校生が押しかけて来るというありさまだった。啓子は若さに任せて、掃除・洗濯・買い物・炊事と一人で大車輪の活躍だった。おまけに動物好きの長男が持ち込んだ犬二匹、猫二匹という賑やかさである。

戦時中に建てられた閑静な日野自動車課長社宅街の古びた一軒家を丸ごと借りていたのだったが、子供たちが入れ替わり立ち代り集まって来ることに、今になって啓子にはご近所迷惑だったろうかと思うことである。

ともかく啓子は、夢中で働いていた。しかしまた自分の子供たちが次々と学齢期に達して、学校から帰宅する頃母親が忙しくなるこの仕事はそろそろ限界だとも思い始めていた。

その頃、啓子は、下の子が保育園に通えるようになったら、外に出て働くことにして、せめて夕食ぐらいはゆっくり家族揃って食べられるようになりたいと思っていた。しかし現実には祐一の給料の三倍、部長の給料ほどの収入のあるこの仕事に代わるものが簡単に見付かる筈もなかった。

その見慣れぬポスターに思い当たることがあった。さきの正月頃、都立短大に進学が決まった高校三年生の女生徒が、

「最近プログラマーという新しい仕事があって、お給料もすごくいいというので、蒲田の富士通の専門学校に行ってみました。そこの生徒さんの話では、とても頭を使うものらしく、数学が出来ないと駄目で、脱落者も結構出るということなので、私は諦めました」

と言っていたことが頭に浮かんだ。「ああ、このことなんだ」と啓子は思った。

ところで啓子は数学には自信がある。目を凝らしてポスターの募集要項を読む。週六日、午前・午後・夜の三部があり期間は1年とのこと。下の子をあずかってくれる人さえ見つければ、午前の部の一年は通学可能ではなからうか。これが新しい収入源になって、現状を変えるものになるかもしれない。そう考えた啓子は、しっかり電話番号を頭に入れた。そして帰宅すると、早速その学院に電話をして、募集要項の書類を郵送してもらったのだった。

問題の学費は全額十五万円。入学時に十万円、六月までに全額納入とのこと。当時の大卒の初任給は二万円ほどだったろうか。十五万円は相当な高額である。しかしそんなことでめげる啓子ではなかった。十万円は翌年の家の賃貸契約更新のために蓄えていたお金を流用することにして、残りの五万円は祐一の夏のボーナスの大半を当てることとして、彼の了承を受けた。忙しさに多少放漫になっている家計を引締めて、またこつこつ貯めなおすことにしようと思った。このあたりの決定は家計の主導権を握っていた啓子の強みと言えた。

次の問題は、よちよち歩きの始まったばかりの一年三ヶ月の三男坊である。これも幸い筋向いの五年生の長女の同級生お宅で引き受けて下さることになった。朝八時から午後一時まで、当時の相場料金の二割増しくらいでお願いすることにした。

案内によれば、四月上旬に選抜試験を行うとのことである。気がつけば当時は、雨後の筍よろしくコンピュータ学校が乱立していたらしいが、啓子には目に入ったポスターが唯一の情報で、それが彼女の進路を決定したのだ。啓子は未知の世界への期待を込めて、受験料同封の願書をいそいそと投函したのだった。

選抜試験は新宿の学院の教室で行われた。案内図を頼りに行くと、南口に出て甲州街道を初台方面に下り、左折する。角から三軒目の新しいビルの一、二階がそれであった。信号待ちさえなければ徒歩五分という近さが嬉しかった。朝の通学には僅か一分が貴重になるのだ。

二階の試験場は、大勢の人の熱気で溢れていた。ベンチ式の椅子に、肘を張る隙間もないほど詰めて座った。

一枚目は数学のテスト。鶴亀算のような算術の問題や、ちょっと複雑な虫食い算が三題、それに物理の初速の放物線の最高点は何秒後にどのくらいかといった、塾をひらいている啓子にとってはいとも簡単なものであった。

しかし二枚目に配られたコンピュータの基礎知識のテストとなると、これはもうすっかりお手上げである。

COBOLとは何のことか、ソフトウェアとはどんな衣類なのだろう。隣の理工系らしい学生が試験官に何やらカタカナ語の質問をしている。いつの間にこんなに時代遅れになってしまったのかと、珍しく啓子は自信喪失気味になった。

それでも合格通知が来た。入学式は工学院大学の講堂とのこと。工学

院大学はかの学院から僅か二ブロックほどの距離にあった。後で分かったのだが、中心の教師群はこの大学の助手たちであった。

啓子は、前日髪の設定に美容院に行ったり、スーツにブラシを当てたりと心を弾ませて準備した。

入学式の講堂は薄暗く、一杯の受講生で埋まっていた。両脇に立っている黒いスーツの若い男女が教師陣らしい。周りの受講生は殆どが高校を出たばかりの若い男女で、社会人らしい人はあまりみかけなかった。

しかし啓子は一向に無頓着。久しぶりに教わる立場にいることが新鮮で、工学院大学の教授の祝辞に身を乗り出していた。

何度も「情報」という言葉が飛び交う。今でこそ耳慣れた語となっているが、当時はスパイ用語の類のように思われて、啓子は何か奇異な響きを受けたのだった。

翌日は、指定されたクラスに分かれて教室に入った。

やはり最高年齢は啓子である。次は三十才の元警察官で、どんぐり眼の人のよさそうな男である。何か勤務でしくじったのでこの道を選んだと、お辞儀をしながら話した。見るからに、コンピュータとは縁のなさそうな男で、あとで、学園紛争を予防するために学院が入れた男だという噂が立った。

その他は、在学中の大学生が何人か、来春卒業の人達で、就職のための箔付けと云うことであった。しかし大半は高卒者で、大学受験に失敗してとりあえず入学したという者が何人か、就職のための技術を身に着けることを目的としての人達の中に混じっていた。

前年は東大安田講堂事件があった年で、学園紛争が多発し、騒然とした雰囲気はどの学園にもあった。その春の受験は、紛争の煽りで、東大は入学試験を行わず入学者はゼロだったから、私立の大学が溢れ、浪人がうようよしていた。

啓子の末弟も、彼女の家から予備校に通っていたが、東大受験がないため、その年の最難関であった早稲田の理工学部何とか入学出来た。彼は、遊び相手をしてやっていた啓子の子供達に「奇跡だ」と騒がれながら、郷里の昔の藩校の後身の学生寮に移ったばかりであった。

黒いセ - タを着た〇君と名乗る青年が、自分は進学校である立川高校の出身で、目標の東大がないので、受験勉強に嫌気がさしてしまって、この道に進もうと思ったと言った。賢そうな眼差しと引き締まった口元が印象的であった。啓子はライバル出現と思った。

隣に座っている眼鏡をかけた色白の華奢な女の子は、秋田出身の素封家の娘で、Kさんという。漆工芸家の叔母の家から通っていて、ピアノが上手で、郷里では劇団に所属していたとか、なかなかやんちゃそうな娘である。

たちまち啓子はオバチャンと呼ばれ、警察官はオジチャンと呼ばれる羽目になった。別に抵抗はなかった。何でもよい、啓子は頑張って一番で卒業しようと思った。

カリキュラムは、週十八時間を十二コマに区切り、内容は月ごとに編成され直すとか。当初は、数学が代数と確率・統計で四コマ、コンピュータの原理の勉強も三コマほど、心理学や経営学などもあって、結構ぎっしり詰まっている。

啓子は、もらった謄写版刷りの何枚もの書類を手提げに入れて、家族と仕事の待っているわが家へ一目散に帰るのだった。

朝八時。啓子はおやつと軽食、着替えなどを入れた籠を持って、三男坊を抱いて託かって頂くお宅へ。大勢の中で育ったこの人懐っこいチビさんは、大切にしてくださる奥さんの腕にすんなりと渡る。それから一キロもないが、中央線豊田駅へ自転車で駆けつける。八時十五分始発の東京行に飛び乗って、新宿駅に八時五十分到着。学院に滑り込んで九時からの講義を受けるといふ毎日が始まった。

十二時に授業が終わると、京王デパートか小田急デパートの食品部で夕食の買い物をした後、特快に乗って一時頃には帰宅。チビさんを受け取ってから昼食を済ませると、一息入れる間もなく三時には来る低学年の小学生に備えねばならない。その後にはもうそれまで通りの生徒相手の過密なスケジュールが待っている。

授業は面白かった。それまで啓子の全く知らなかった世界であった。ONとOFFの二種類しかない状態をAND回路、OR回路、NOR回路を組み合わせて作る、加算機の原理はたちまち啓子の得意とするところとなった。これは小柄でせかせかとした工学院大学の助手TK先生の担当である。

数学も、順列・組合せ・確率とも好きな分野である。黒板に書かれた問題を一早く解こうと夢中になった。これもやはり工学院大学の助手であるTG先生の担当で、TK先生とは対照的に、大柄で動作もゆったりとのんびりした感じの先生である。

もう一人の代数の先生は、東大卒で夜間の都立高校の教師とのこと。アルバイトの講師だった。噂では、過激な学生運動の一派、ML派の闘士なのだという。色白の小柄な若い人で、いつも洗い立ての黒髪がパサパサと立っていた。こちらには一切お構いなく、黒板に分数関数の微分の式をさっさと書いて行く。高校ではN次関数の微分までしかやっていなかった啓子は、これはひたすら書き写すばかりである。その後この先生から、行列式も教わった。

コンピュータの歴史や事務との関わりなどのお話は、M先生で、前身はどこかの会社のサラリーマンで、事務管理担当ではなかったかと思われる。丁寧な教え振りの温厚な人であった。真空管時代、トランジスタ時代を経て、今は集積回路ICの時代、第三世代と呼ばれる時代だということだった。中央演算処理装置・CPUやインプット、アウトプットなどという言葉も、その頃は一般にはなじみのない単語であった。菱形や楕円の穴の開いた定規を使っているフロチャートの書き方も先生の担当だった。

学院の正規の教授陣は、TK先生、TG先生とM先生の三名だけで、あとは必要な科目ごとに講師を雇っているらしかった。

五月に入って、機械語という授業が始まった。F先生という、色黒のすらりとした先生で、内気そうな人が担当である。

記憶装置上(メモリ-)の何番地かに値を入れ、アキュムレ-タレジスタ-という算盤の役目のレジスタ-で計算を行いまた何番地かに格納するといった計算機を動かすための手順を作る、いわゆるプログラミングであるが、それを最も基礎的な数字ばかりで成り立つ命令を使って行うのである。

学院に備えつけられているコンピュータはNECのNEAC1240という機械で、それはそれ専用の命令を使わなければ動かない。まだまだコンピュータの草分けの時代であった。

啓子は、もうすっかり忘れてしまっているが、例えばロードメモリが201とか、ストアメモリが310とか三桁の数字がデータを処理する命令で、あとに四桁の実アドレスの数字を加えて、七桁の数字が処理の手順となる。その命令手順の列を作る作業がプログラミングである。

簡単な練習問題のコーディングの後、実際に機械を動かすこととなった。まずコーディング用紙にプログラムを清書して事務所に提出する。これらは二、三日後、キ-パンチ専門の先生が紙テープにパンチして返して下さる。パンチ済みのグリーンの紙テープには、それぞれの学生番号が赤サインペンで書かれている。おのおの自分のテープを手にとると、初めて機械室に入ることになるのだった。

先生が一階の正面入口の右側のドアをおもむろに開けると、私達はかしこまって後に続く。促されて靴をスリッパに履き替え室内に入った。そこにはブル-の大型デスクのようなユニットが五つ程整然と並んでいる。空調が効いていて涼しい。

一人ずつ順番にパンチされたテープをテープリ-ダ-に掛けてスタートボタンを押す。ガチャガチャとテープが読みこまれて、正しければ答えが打ち出されるという仕組みである。エラー-の場合はどうだったろうか。今は記憶にないが、エラー-ランプが点滅したりしたのだろうか。

うまく答えが出なくて、これは機械の仕組みがおかしいのではと聞く人がいる。

「間違っているのは人間です。機械は絶対に正しいのです。」とおとなしそうな先生なのに取り合わない。本当にそうなのだろうか。そんな断言が出来る程、絶対に正しい動きをする機械が出来ているということが、当時の啓子達にはまだ不思議であった。

僅か2000ワードの小さな機械。今なら玩具にもならないものであるが、啓子は「私は時代の先端に行く勉強をしている」という満足感を心底味わっていた。そして、すんなり通過したのはやはり啓子とO君の二人だった。啓子は、この世界の第一人者になるんだと、やや興奮して気負っていたのだった。

五月に入ると通学生活も定着して、昼食を新宿駅近くのスナックで手早く済ますことが多くなった。しかし早く帰ることを一番に心掛けていたから、授業の後、勉強仲間と一緒に行動することは殆どなかった。

カリキュラムに実習の時間が増えるに従って、いつの間にか定着した席の前後左右の人達との会話の機会が多くなった。

お隣のK嬢は、心理学の授業で調べた分析で、知・情・意の分布が啓子と似た線を描いていると言って喜んだし、前の席の学生服を着た鹿児島出身の若者は、啓子の長男が六年生で、本籍地が鹿児島県であることを知ると、ラサルという良い学校があるから是非受験させるようにと勧めてくれたりした。

家からこれは姉のものだがとって、ホクソングのレコードのセットをごっそり持ち出して、啓子に貸してくれた娘さんもいた。斜め後の、肩に素直な黒髪を長くたらしめた娘さんは、休み時間にギタ-を抱えていたのが印象的だったが、五年ほど後に米沢で結婚式を挙げ、啓子ははるばる米沢に招待されたのだった。

武蔵大学の学生H君は、後に証券会社に入ったが、当時から株で相当なお金を動かしていたらしく、学生らしからぬ貫禄があった。お金の運用について教えてもらうには、啓子の通帳はあまりにもスッカンピンだったが。卒業後、啓子が自宅に招いたことがあった。彼は祐一に将来は大きな文化施設を作りたいと夢を語っていたが、高度成長期も過ぎ去った今頃は、何処でどうしているのだろう。

日を追って宿題が多くなった。プログラムのコーディングの問題も多くなったし、数学も高度になってきた。プ-ル代数という科目も始まった。日々新しい分野に進み後退はない。啓子は、これは一日でも休むと着いていけなくなると思った。宿題はなるべく帰りの三十分の電車の中でこなすことにして、多少熱があるうとも鞭打って、ついで欠席することはなかった。持ち前の頑張り根性である。

事実、欠席した人は、次々に脱落していった。六月はじめには常連は四十数名になっていた。そしていま明かせば、翌年の三月、無事卒業できたのは僅か十八名になってしまい、終了資格免状を貰えたのはたった三名だったのである。

初夏のある日、O君が「皆で遠足に行こうよ」とクラスに提案した。勉強を忘れて、自然の中で歓談したいと云う思いが湧いて来たのも不思議ではなかった。俄然、活発な意見交換が始まった。

六月も終り近い日曜日に、名栗川にハイキングと決まった。秩父の飯能駅に弁当持参で集合することになった。

名栗川には思い出があった。大学一年の夏休みにクラスの遠足で行ったのだった。二つ程の山に登った。雑木林を縫って山から山へとんとんと歩いた。木漏れ日をあびながら、細い山道を男女交々一列になって進んだ。足元に気を取られながらも、皆大声で合唱しながら。

「村のむすめは、すみれのひとみ - -」  
間奏のチャンチャラチャンチャラチャンチャラランランランという歌声

は今でも耳底にある。そして歩きに歩いて行き着いたのが名栗川だった。十五年も前のことだ。

「オバチャン、絶対来てね」

と隣のK嬢に念を押される。日曜日は家事で忙しいが、うまく段取りすれば半日だったら何とかかなりそうだと、啓子も心が動いた。結婚以来、半日もこうした解放された時を持ったことはなかった。

当日は、早朝からおむすびを二十個作った。お弁当には、多めに五個包んで、残りは家族の昼食分である。

飯能駅には二十数名が集まった。河原に着いて、それぞれ釣りをしたり、水遊びに興じたりして、屈託なく時を過ごした。岩に腰を下ろした啓子は、ただ眺めているだけで結構楽しかった。お弁当を平らげた頃は、もう彼女のタイムリミットになっていた。

別れを告げて、対岸の道を一人バス停へと急ぐ。日に映えた青葉の群れの緑が壮年の逞しさを感じさせ、川面に濃い影を落とすようにしていた。

木立の合間から河原に向かって手を振ると、気付いた数人が手を振ってくれた。いつか啓子も二十歳の気分になって、歌を口ずさみながら足を早めたのだった。

六月末。学費納入の期限が迫った。啓子はこの勉強に誇りを持っていたので、祐一にも学院を見て認識して欲しいと思った。彼は中堅の損保会社に勤務していたが、営業に移ってからはそれまで以上に夜遅いことが多くなっていた。

ある日の昼に啓子は新宿で祐一と待ち合わせた。残りの学費を夫に窓口で支払ってもらうことにしたのだった。新調した濃紺の背広を着て窓口に立った祐一は、中年になってやや太りはじめた頃で、堂々として貫禄十分であった。二、三の友人に夫を紹介して啓子は満足だった。

数学は、啓子の高校生の頃にはなかった集合と行列に入り、プログラミングも機械語と並列してアセンブラも始まって、電車の中での勉強もきびしくなっていた。

アセンブラは、TK先生の担当で、小気味よい切れる授業ではあったのだが、

「もっともっと生徒数は減った方がよい。実習には、この半分くらいが適当だ。」

と公言して、宿題を連発しての締めつけが始まった。

学費を納入させ終われば、あとは脱落者歓迎ということらしい。

「負けるものか。」

と啓子は心密かに思った。

このTK先生の態度に対する若者たちの反発が、翌春爆発し、遂には学院も閉鎖してしまうのだがそれは後のことである。

ある時、アセンブラの宿題で「お遊び」という問題が出た。1を打ち出したあと、2を二列二段、3を三列三段というように数字をだんだん

に大きな正方形に9まで打ち出せというものだった。

機械室で、先ず先生のテ - プをかけると、1、2、3、と数字の幾何学模様を描く。次に生徒のテ - プをかけるのだが、うまく打ち出せるものはなかった。啓子の番になった。

先ずO A S O B Iというタイトルを用紙の中央に打ち出す。1を打ち出したあと一行何も打たない。TK先生は「君も駄目か」というように得意気に啓子を見た。しかし機械は次の行に2を二列打ち出した。啓子は一ブロック毎に空白の一行を入れるようにわざと作ったのだった。仕上がりは啓子の方が恰好よく出来た。結局先生は何も言わなかった。

七月末には、期末テストが行われる。代数だけは、先生の都合か十日程前に行われ、十名ほどの落第者の学生番号が発表された。夏休み後に追加試験を行うという。

顔色が悪くヒステリックな感じの後ろの女の子が、蒼白な顔をして若い教師を詰問した。啓子も多少同情してはいたが、まあ二学期にやりなおせばいいのではと思ったのだった。しかしその子は二度と学院に姿を見せなかった。

啓子も代数は最高点とはいかなかった。じっくり考えるのが得意で、三角関数の公式などは自分で作れると思っていたのだが、この高等数学は、短時間にそんなことを許すものではなかった。数学のテストがこんなにも公式の暗記を必要とするものだと、啓子には大きな発見でもあった。

啓子のスケジュールには、家での勉強の時間は全くないから、何かというと朝三時に起きて取り組むしかない。必然的に電車の中では居眠りとなる。暑さの中、体力も限界のようだ。全科目一番は無理なのかと、啓子はがらにもなく一寸弱気になりはじめた。

陽射しのきついある日、買い物を終えて小田急デパ - トの脇を通ると、そのウィンドウのパネルに、何か動いているのを大勢の人が見入っている。壁面一杯のぼやけた画面に、何かロボットのようなものが躍っている。

「月面着陸に成功したんだよ。」

怪訝な顔をして覗き込んでいた啓子に、教えてくれた人がいた。

ああ、人類の夢の一つがかなったのだ。今日という日はきっと歴史に残る日となるのだろう。

戦後は全くの焼け野が原で、闇市の並んでいたこの新宿の西口界限も、開発目覚ましく高層ビルが建ち並んでいる。啓子にとっても、日本にとっても、今がこれから盛夏に向かう青葉の時代と言えるのではないだろうか。若者たちは、

「戦争を知らない僕たちなのさ」

と歌っている。ベトナム戦争もいずれ収束することだろう。

今はまだ、きついことばかりの日々ではあるが、きっと未来は明るいことだろう。啓子は自分の勉強しているこの技術も、今に日本を、いや世界を動かす様になるに違いないと思っている。

ほのぼのとした気持ちで、帰りの電車に乗り、空席を見つけて座った。  
そして高校時代に見た映画の「D I S T I N A T I O N   T H E   M O  
O N」の場面を思い浮かべながら、ゆっくりと目を閉じたのだった。

終